

- 24) F. Shafizadeh "Advances in Carbohydrate Chemistry", vol. 23, edited by M. L. Wolfrom and R. S. Tipson, Academic Press, New York, p. 467-470 (1968).
- 25) F. Shafizadeh, *J. Polymer Sci. C36*, 21 (1971).
- 26) N. I. Nikitin, "The Chemistry of Cellulose and Wood", translated by J. Schmorak, Israel Program for Scientific Translations, Jerusalem, p. 577-578 (1966).
- 27) T. Hirata and H. Abe, *Mokuzai Gakkaishi* **19**, 451 (1973).
- 28) F. Örsi, *J. Thermal Anal.* **5**, 329 (1973).
- 29) T. Hirata, H. Okamoto and K. Naitō, *Mokuzai Gakkaishi* **24**, 243 (1978).
- 30) T. Ozawa, *J. Thermal Anal.* **7**, 601 (1975).

IUPAC 第30回総会報告

隔年ごとの上記総会は、今年は9月3日から10日までスイスのダボスにおいて開催された。筆者の参加した熱力学委員会での議論の中から、熱測定学会に関連の深いいくつかの事項についてとりいそぎ簡単に報告したい。

1. グリーンブック(「物理・化学量および単位」に関する記号と述語の手引)へのAppendixについて

従来から、Appendix IVとして、(1)化学熱力学における“標準状態”の定義・記号の明確化、(2)熱力学データ表における関数について、の2点が論議され、いろいろ問題があるため結論が出なかったが、今回も(1)標準状態圧力として従来の101 325 Pa(1 atm)を捨てて、あらたに1 bar (=0.1 MPa)を採用すべきだ、との強い提案があり、激論の末、影響が他分野にも及び大きいことを考慮してペンディングとなった。(2)熱力学関数として、いわゆる自由エネルギー関数の有用性には異論はなく、その符号も ϕ (phi) を用い

ることで一致したが、名称については前回の米国グループよりの提案、“Tempered Gibbs Energy”は反対が多く、あらためて“Giauque function”または“phi function”とすることでほぼ合意した。最終決定は次回に持ち越された。(これらについては、のちほど、本誌に詳しい報告をさせていただくつもりである。)

2. 次の第6回国際熱力学学会は、明1980年8月26-29日に東独メルゼブルグで開催されるが、世話人のRätzsch教授より、東独入国のVisa取得の関係から、参加希望者は全員、明年1月1日までに参加申込みと東独への入国申請を提出してほしい、との要請があった。従来の慣例よりはるかに早い時期なので注意していただきたい。

3. その次の第7回国際熱力学学会は、McGlashan教授の招請を受けて、1982年夏に、ロンドンで開催されることに内定した。

(東大工・高橋洋一)